



フィジー通信

No. 4
2018年12月

青年海外協力隊2017年度1次隊 栄養士 佐藤綾己（あやみ）



Bula! 先日、秋田の友人が、雪の降っている様子を動画に撮って送ってくれました。雪がチラチラ落ちるのが綺麗で、冬を懐かしく感じました。フィジーには四季はありません。そこで私は気づいたことがあります。四季がないから、時間が経っている感覚を感じにくくてフィジーの人々はゆっくりしているのではないかと思います。私も時間が経つを感じなくてゆっくりしてしまいます。最近会ったアメリカ人にもこの話をしたら、同じことを考えていたと言っていました。四季が在るのも無いのも素敵です。さて、今回はフィジーの街と村の生活を紹介します。街は驚くほど発達している一方、村は昔ながらの生活が残っています。



街の生活(首都スバ)

フィジーの首都スバは、私の感覚として秋田市に近いくらいの都会です。初めてここに来た時とても驚きました。品ぞろえの豊富なスーパーマーケット、行き交うたくさんの車（しかも日本車の中古が多いです）、電気屋さんにはiPhoneを始めとするアップル製品も一部ですが売っています。私はフィジーでは手に入らないと思って、2年間過ごすための電子機器や充電ケーブルの予備をたくさん持ってきましたが、そんな心配は不要でした。レストランやカフェが多いので、食事は外食やケータリングをする人も多いです。特に若年層には、マクドナルドとバーガーキングが大人気です。



▲24時間営業のコンビニもあります



▲野菜と果物が並ぶ市場



◀ショッピングモールにあるフードコート。2歳のこの子は、コーラ、ポテト、フライドチンを一人前与えられて食べていました。おせっかいですが、少し心配です。

身近な映画館

フィジーには映画館が6つあり、そのうちの2つが私の住んでいるスバにあります。料金は1回約350円と安く、また、翻訳の必要がないので外国の話題作は日本よりも早く公開されます。毎日のティータイムにも「あの映画見た？」との話題が出ることが多く、映画は街に住んでいる人にとっては身近な娯楽です。スター・ウォーズ エピソード8（最後のジェダイ）は観ましたか？これは私がフィジーで観た初めての映画です。映画館であっても、フィジーの人々はどんな小さいことも拾って大笑いします。そんなに頻繁に大笑いするシーンはなかったと思うのですが、まるでコメディ映画の様に笑いが起こっていました。私がクスッと笑うところでも、多くの人が「あっひゃっはっはっはー！」と笑います。こんなところでもフィジー人の明るく陽気な性格を見ることができました。



▲映画のお供は大きなコーラとポップコーン

村の生活(フィジアンビレッジ、インディアンビレッジ)

都市を離れると、人々は村という単位で生活をしています。それぞれの村には長がいて、その村ごとのルールが決められています。村の規模は、秋田市山王地区のような大きさや、山王の中でも〇丁目のみくらいだったり様々です。フィジーの文化の二大勢力であるフィジアンとインディアン。首都スバから車で30分ほどのそれぞれの村にホームステイをする機会があったので、その時の様子をお伝えします。

フィジアンビレッジ

村のルールで一番気を付けなければならなかったのは、女性は膝を出して外を歩いてはいけないこと。暑くて短パンを履いていても、家の外に出るときは腰に布を巻かなければなりません。村に在る間は教会に出掛けたり、空き地でラグビーをしているのを眺めたり。ただただゆっくりと時間を過ごしました。



▲あまりに大家族なので、誰が家族で誰が近所の子なのかよく分かりません。



▲ウクレレで遊びました。私がコードを抑えて、妹がジャカジャカ。きらきら星や、教会ソングを歌いました。



◀ダロ芋が茹で上がりました！主食となるダロ芋、キャッサバは村のあちこちで栽培されています。

インディアンビレッジ

食事は毎日3食ともカレーでした。ベジタリアンの家庭だったので、ナスやカボチャや豆など様々な種類のベジタリアンカレーの作り方をここで覚えました。家の周りには、どこの家のか分からない鶏がウロウロしていたり、トタンの屋根からは鳥が歩く音がよく聞こえてきました。夜は蚊帳（かや）に入って寝て、おやつには庭に生えていたバナナを採って食べました。お祈りの時に使うお花を摘んでくるのが私の仕事でした。仕事を与えられたことで、本当の家族の一員として扱ってもらっているようで嬉しかったです。



▲ママとカレーをつくっているところ。



▲石と石で豆をすり潰します。



▲毎朝お祈りをする場所。



▲子どもとお散歩。一緒に歩いてるだけで楽しい！

どちらの村もみんなが優しく、「またいつでも遊びにおいで」と言ってくれました。私はその言葉に甘えて、それぞれの村に何度か訪問しています。現像した写真を持って行って思い出話をしたり、結婚式に参列させてもらったり。街に住んでいると、リアルなフィジーの文化に触れることのできる機会は少ないのが正直なところ。それでもこの家族の存在があるからこそ、人々のありのままの生活を知ることができ、それが協力隊としての活動の基盤にもなっています。

それではまた次号でお会いしましょう。Moce. Sota tale. (モゼ ソタ タレ/またね)